

■会議開会

■委員自己紹介

■検討委員会の趣旨説明（事務局）

- ・教育支援センターについて、1月にNPO法人SOMAが取り組むi.Dareの実証が始まった。その結果、学校・保護者を中心に関係者の中で混乱が生じた
- ・併せて、住民、議会等から様々なご指摘があった。
- ・その争点は大きく2つ。1つは、i.Dareの事業に協力する立場である教育委員会事務局としても、関係者の皆さんへの事前説明がまったく足りてなかったということ。もう1つは、学校でもi.Dareでもどちらでも選べるというチラシの表現等もあり、2学期まで学校に通っていた児童にもi.Dareへ行くことを選んだ児童が出たこと。大きくはその2点についてのご指摘・ご批判であった。
- ・それを受けて町長としても教育支援センター事業については検討委員会を作ってゼロベースで見直すと表明し、この検討委員会を設置するに至った。
- ・役場でも様々な場面で検討会を作ることがあるが、その多くは役場サイドから計画案などを示したうえで、それに対して委員の皆さんからご意見を頂いて修正していくという会が一般的である。しかし、この検討委員会についてはそうではない。最初から計画案等を示すことはせず、文字どおりゼロから話し合っていたいただきたい。ただ、何から話したらいいのかということもあるので、事務局から適宜こういう内容について話し合っていたいただきたいという議題はお示しさせていただく。委員の皆さんにはそれぞれ奇譚のないご意見をいただきたいが、最終的には、検討委員会の意見として一定集約はしていただきたい。
- ・その検討委員会からの意見をもとに、事務局として具体案の検討をし、必要に応じて予算要求もしていく。ただし、財政状況や人材確保の問題等により、検討委員会からいただいた意見が全て実現できるわけではないということをご理解いただきたい。
- ・また、会議は原則公開で、今日のように傍聴もある。発言される場合は一人ずつ、マイクを使って発言をお願いしたい。

■土佐町小学校（i.Dareに通う）保護者ヒアリング

それでは会に入りたいが、第1回目は、委員の皆さんに現状を理解していただくことから始めたい。

今日はi.Dareに通う児童の保護者の方々にも来ていただいております、児童の状況等についてお話をいただきたい。

保護者A

- ・小学●年生の子は学校が好きだから学校へ行っている。
- ・（i.Dareへ行っている）上の子は学校に仲のいい友達もいない、先生も、学校もつまらないと言っていた。
- ・いじめ等の大きなきっかけがあったわけではないが、親も含めて周りの大人に言いくるめられるようにして登校していた。
- ・学校では真面目で熱心な生徒だったと思っている。ただ、そんな我が子の思いを汲んだ上で学校で個別対応してもらうのは難しいと感じていた。
- ・●年の担任は好きだったが、●学期末の面談の前に本人に聞いたら、（次の）●学期は行きたくない、説得されるから先生とも話したくないと言った。結局それから行かなくなり、その後、i.Dareスタートと同時に行き始めた。
- ・甘いと言われるかもしれないが、子どもに楽しいことを選ばせてあげたい。学校に居場所や楽しさを見出せない子供を無理に行かせたくない親としては思っている。
- ・i.Dareに行き始めて子どもの変化は特に感じていない。たった1ヶ月で劇的に結果なんて出るはずがないとも思う。ただ、●●は楽しそうに通っている。親としてはそれだけで十分。

- ・4月以降も●●は学校に戻るつもりはない。i.Dareがなければ家で過ごすことになるだろう。
- ・悲しいことだが、大学・高校はもちろん、中学校にも行きたくないと言っている。そこまで学校が嫌いになるまで何も手を打てなかったことには、親としてもとても責任を感じている。
- ・そこまで学校が嫌いな子が楽しく通える場所（i.Dare）があり、そして仲間もいることはとてもありがたいし、i.Dareは私の希望。
- ・色んな人から学力の心配もされるし、学校に行けなくて可哀想という声も聞こえるが、学力なんて親にとってはどうでもいい。楽しく遊べる、遊びから学べる場がある方が、家で引きこもるよりずっといい。楽しんで通える場がある、それだけで本当にありがたい。

保護者B

- ・小●年生、i.Dareが始まるまでは小学校に通っていた。
- ・●年生の最初の方は楽しんで学校へ行けていたが、徐々に楽しくなさそうな雰囲気を感じていた。今日学校で何をしたと聞いても「わからない」とか、何も答えてくれない。
- ・「誰が友達？」と聞いても「友だちは1人しかいない」とか、「休み時間も絵を書いて一人にいる」と答える。そう聞いて親としても苦しい思いだった。
- ・勉強面でも宿題など見てみると、理解度が低いと感じた。元々、親としては学校だけが唯一の選択肢じゃなくてもいいと思っていた。自分も勉強ができなくても、友だちができなくてもがんばって小中学校に行っていたので、根性論で「がんばって学校に行け」と言った方が子どものためには良いと考えたこともあったが、何が正しいのか、何が子供に一番いいのかは答えがないと思い、子どもが学校を休むことも容認してきた。
- ・そんな中でi.Dareが始まった。面白そうと思い体験会に参加した。その後、子供にi.Dareに行きたいかと聞いても明確な答えはなく、親としてもi.Dareの内容もよくわからない状況で、行かせる気もなかった。
- ・そんなとき、学校で子どもが先生から「i.Dareに行くのか？」と聞かれ、子供は「i.Dareへ行く」と先生に答えたと、後から聞いた。それを聞いて、子どもの状況も考え、何より本人がしっかりと意思表示をしてくれたことが嬉しくて、子供の意思を尊重しようと思断した。学校との単位交換が可能という事については、土佐町が教育に対して一枚岩で取り組んでいる印象を受け、嬉しく思った。
- ・子供の様子。毎日楽しそうだった。どんなことをした、どんな人と友だちになったと自慢してくれるようになった。こういうことは今まであまりなかった。
- ・誰が友達かと聞いたら、i.Dareに行ってる子全員が友達と言ってくれたのが何より嬉しかった。
- ・4月以降、できればi.Dareに行かせてあげたい。i.Dareのやり方がすべて正しいのかはわからないが、事実として子どもは学校は楽しくない、i.Dareは楽しいと言っている。勉強面でもi.Dareに特に不安はなく、できれば行かせてあげたい。
- ・学校にもi.Dareにも特別な期待はしていないが、子供は「学校は楽しくないけど、i.Dareは楽しい」と言っている。学校も変わろうとしているとは思いますが、大きな組織でそう簡単に変われないだろうとも思う。また、変わろうとする本気度や熱意について、学校にはそんなに感じられないが、SOMAの方からはヒシヒシと感じられる。

保護者C

- ・●●月に引っ越してきた。小学●年生。
- ・当初はもちろん学校も子供たちも暖かく迎え入れてくれたので楽しく学校へ通っていたが、数日行って休みたいと言いだした。
- ・まず自分では朝起きようとしなくなった。朝の準備も捗らない。本人が行きたいと言って準備して家を出る時もあったが、学校の駐車場で怖いと言って車から出られない。先生が駐

車場まで迎えに出て来てくれても、怖いと言って入っていけない。車で学校へ行く途中も、徐々に表情が曇ってくる。どうしたと聞いても本人は何も話さない。

- ・ そんな時にi.Dareの話を聞いて見学に行ったら、その場で子供は行きたいと言った。
- ・ その後、学校、教育委員会、SOMAと話し合っ、結果、i.Dareに行ってみるのがいいだろうということになり、2月から数日行ったが休校になってしまった。
- ・ i.Dareでは自ら車を降りて中へ入って行く。子供自身が幸せな表情をしており、それが一番と感じている。
- ・ 4月以降もi.Dareが存続するなら通わせてあげたい。学校に行けと言ってもたぶん行けないだろう。本人の気持ちを尊重したい。

保護者D

- ・ 小●。i.Dareに通っている。
- ・ 学校に行きたくない、行けない、行かない子がいる。親、教員、大人の言葉に傷ついている子はいら。子供は優しい。表現がうまくできないし、大きな大人の対応に怖さを感じても親にも言わない。何気ない一言で傷ついている子は、学校行ってる行っていないに関わらずいる。
- ・ 不登校は子どものSOSだと思う。教育が変わって時代が変わって親も不安、学校も大変で、みんなが苦しんで。知人の教員も苦しんで。子どもも苦しんで。不登校に関して、子どもは学校へ行かないという行動に出る前に苦しんでいる。
- ・ アルツハイマーとも似ている。側から見たら普通に見えても、実は心の中では苦しんでいる場合がある。自分は学校行きたくないと思ったことはあまりなかった。子どもが学校に行きたくなくなるのは、親でさえ気づけないこともある。不安だが子どもには親が不安がっている姿は見せられない。
- ・ 勉強嫌いでも友達がいれば楽しいだろう、学校だから学べることがあると言われることもある。親としても子どもが学校に行っ、楽しそうにしている姿を見られれば嬉しい。子供の気持ちと親の気持ち、周りからの言葉、視線で辛くなることもある。
- ・ どうにかして学校へ行かせたいと思った時期もあったが、朝起きようとしな。玄関先で出れなくなる。先生に迎えにきてもらっても行けない。兆候は少しずつ出てくる。
- ・ 学校へ行かないと、子供はその日誰にも会わず一日中家に一人であることになる。親としては不安になる。子供の将来（社会性）のことを考えると余計に。友達とは遊びたいと言う。でも学校には行かないと言う。その気持ちはどんな気持ちなのか。
- ・ 不登校になるとそもそも学校とは？教育とは？親とは？地域とのつながりとは？と色々考える。子どもが大人になった時のことを考えると、何を大切にしてほしいか考えると、学校に行く行かないだけではなくて、どれだけ自分を大事にできるかだと思う。（自己肯定感）
- ・ 学校があることはありがたいこと。学校へ行って楽しい子はいら。同級生も誘ってくれる。友達として。それはありがたい。でも学校がフィットしない子は昔からいる。学校ありきではなくて、学校で学んでもいい、他で学んでもいいという選択肢が子供にあることは大事だと思う。今回事前に十分な説明がなかったのはその通りだと思うが、選べるのがおかしいという考えには賛成できない。
- ・ i.Dareの考えでいいと思ったのは、子供に強制しない、子供と一緒に考えてくれる、子どもの意思を大切にしてくれるところ。i.Dareみたいな形があることも受け入れてもらえると嬉しい。
- ・ 特に地方では、学校に行けないと、学校以外の選択肢はほとんどない。i.Dareに限らず、学校以外の選択肢（受け皿）があるというのは大事。
- ・ 子供の時に地域で楽しい記憶があると、大人になって（子育てに）戻ってくる確率は上がるという話もある。人の温かさ、自然、ふるさを感じる経験が子供にとって大事。
- ・ 持続可能な町づくり。子どもがどれだけ町に残るか。移住促進の面でも学校以外の選択肢は大事。選択肢が多いのは都会の良さだが、土佐町のように自然があっ、人が温かくて、さらに学校以外の受け皿もある環境があればパーフェクトだと思う。

- ・ i.Dareに通いだして、行った日は必ず楽しかったと答える。楽しいだけでいいのか、我慢も必要という意見もあるだろうが、楽しさや安心できる環境があるから我慢もできる。
- ・ 学校に行きたくなくなった子にいきなり勉強させるのは難しい。i.Dareはまず安心・信頼できる関係をつくることにすごく配慮していた。
- ・ 今回のi.Dareのことで町の中で意見の対立もあるが、こうあるべきというのは置いておいて、反対側の人の意見も受け止めることが大切かなと思う。

保護者E

- ・ 姉妹でi.Dareに通っている。i.Dareに行くことを親から強制したことはない。
- ・ 冬休みのイベントに参加していた。チラシも見て、「学校でもi.Dareでもどっちでもいいがどうする？」と聞いたら、本人は「i.Dareに行く」と言った。語弊があるだろうがi.Dareができて不登校になった。
- ・ 不登校というと、みんな暗い顔をして心配してきてくれる。
- ・ 学校へ行ってきていた頃は親としては安心だったし、何も考えなくてよかった。i.Dareに行きはじめて、むしろ自分（親）が楽しい。子どもとの会話も増えた。
- ・ i.Dareでは昼ごはんを自分たちで調理するから、包丁等でケガをして帰ってくることもある。i.Dareには失敗から学ぶことができる環境がある。
- ・ 最近、工業高校の先生と話した。今の子はカッターの使い方も知らず工業高校に来ると言う。高校生になるまでにカッターの使い方も習ってない、教えられてない、自分で学ぼうとしてきていない。工業高校に好きで来ている子は半分もいないとも言っていた。そんなんで大丈夫かと思った。
- ・ 土佐町に来て9年目。仕事柄、知り合いも増えた。知り合いから「子ども、学校へ帰したほうがいい。先のこと考えてるか」と言われたこともある。思い返すと自分も好きで学校へ行ってたわけではない。高校くらい出ておかないといけなと言われて行っていた。この会には校長先生もおり失礼を承知で言うが、学校で学ぶことに意味はない、社会に出てから勝負と思っている。大人になってからでも学べるし、自ら必要と思って必死に学ぶことの方が大事だと思っている。i.Dareへ行っている子は自分たちで調理して怪我をして自ら学んでいる。
- ・ 町長は、この町は教育を一丁目一番地に置くと言っていた。この町は凄いなと思っていた。i.Dareを認めてくれた町長も素晴らしいと思っていたが、今はがっかりしている。
- ・ この3月でi.Dareがなくなっても、個人としては構わないと思っているが、この町の未来を考えるとそれでいいのかと思う。日本の教育が変われないからi.Dareのようなものが生まれるのではないか。学校もそれ以外のものもあって、それぞれがいいところ取りしていけば良くなっていくと思う。
- ・ 4月以降、子供達も学校に帰りたいたとは言わないかもしれない。そこはわからない。
- ・ 町として移住支援もやっているが、教育も両輪になってはじめて未来に繋がるのではないか。i.Dareに関して、本当にこんなことにしてしまっているのかかなと思う。やり方がどうだったか、伝え方がどうだったかと過去のことを議論してもしょうがない。未来を見ることが大事。
- ・ 今回の委員も自分で手を上げさせてもらった。言いたいことは言わせていただこうと思っている。

(ヒアリング終了後、保護者退席)

■議事① 委員長、副委員長選出

委員からの立候補、推薦がなかったため、事務局案として井手委員を提案し、承認された。井手委員長が、副委員長として山首委員を指名した。

委員長 井手 正

副委員長 山首 尚子

■議事② 現状の説明、情報提供

・事務局より、配布資料の説明

・校長（谷内委員）より、不登校児童の状況と学校の対応について説明

・不登校傾向のある児童について、原因は様々。家庭でのトラブル、子供同士のトラブルなど色々だが、子供同士のトラブルで、それが解決すれば来れるようになる子もいるが、それを解決する時に子供同士で解決できないのが今の子どもたちの状況。子ども同士で解決できない場合は教員が間に入って仲裁する。家庭の理由の場合もある。

・それぞれの子ども、保護者に対し教員は聞き取りもし、できるだけ学校に来れるように、阻害要因があればそれをどうやって取り除くかと考え、対応している。

・様々な原因の100%を教員で解決することは難しいが、少しでも解決に近づけるよう取り組んでいるのが現状。

・学校の取組の一例を話すと、学校に来辛くなる子は自信がない子が多い。自らチャレンジしようとする子は少なくなっていると感じており、何かに自信を持って取り組んで成功するように教員もフォローするような取組をしている。子どももチャレンジして達成できて人から認められれば嬉しくてもっと頑張るので、そういうことが不登校対策にも繋がると考え取組をしている。

・一人一人の詳しい事情等は公に言えない部分もあるのでこれくらいにしておく。なにか質問があれば聞いていただければ。

委員長

ここまでで何か質問はないか。

→特になし

委員長

・何点か整理しておきたい

・i.Dareと教育支援センターは別の事業であるということ。

・新聞報道にもあった「i.Dareとの共存はない」という町長の発言は、教育支援センターをやらないという意味ではない。この検討委員会が立ち上がっていることからご理解頂いていると思うが、そこは混同されないように。

川田委員

①配布資料の文科省通知（R1.10.25）について事務局から説明があった。これまでは文科省も（不登校対策の方針として）学校に戻すことを目標にしていたが、R1.10.25の通知でこれまでの通知は廃止し、必ずしもそうではなくなったと。先程の校長先生の話ではがんばって学校に戻そうとしているという話と差があると感じた。その方針について教委と話はできているか。

②i.Dareがなくなることで子供たちはどうなるのか。

⇒谷内委員

①教員としては、一回受け持った児童を自分で指導して、最後まで送り出す。それが仕事だと思っているので、できるだけ学校に戻って来れるようにするのは当たり前のことと思っている。

②今回、教員感情として、何の相談もなしに理由もわからずにi.Dareに行くから学校に来ないと言われ、教員としては「自分の指導は何かいけなかったのか」「どこが悪かったのか」、そういうことが何もわからないままi.Dareが始まった。そのためi.Dareに対してもSOMAに対しても教育委員会に対しても教員は不安や不信感を持っているというのは知っておいていただきたい。

現実には、様々な理由で学校に来れない子がいるのも事実。

その子たちが引きこもりになって誰ともコミュニケーションを取れないとか、大人になっても家から出られないとか、そうならないためにどうするかというのが教育支援センターの役割ではないかと思っている。

学校だけでは対応しきれないこともたくさんあるので、それを補っていただけるような教育支援センターにするためにはどうすることが必要かということのをこの会で考えていっていただきたい。

学校と教育支援センターと行政と保護者が一緒になって、学校に行きにくくなってる子がいても、外で遊んで、学校にも顔を出せるように、堂々と外に出て、人目を避けなくても済むような環境を作っていきたい。

川田委員

その子にとって何が一番いいのか、その方法を考える、相談できる場があればいいなと感じる。

新谷委員

・校長先生に質問したい。学校として、こういう事業が始まった時に、当然学校が本流で教育は学校で学ぶものという思いはあると思うが、それ以外のものが出てきているということに先生たちの認識、危機感みたいなものは持っていないか。

・「聞いてない」「知らない」で済む問題だろうか。僕は子どもに対して「知らない」「聞いてない」でいいとは思わないが。

⇒谷内委員

・もちろん子どもにはそうは言わない。ただ、教員の感情としてはあるということを知っておいてもらいたいという意味で言った。

・学習指導要領に基づいて学校教育を行うのが教員であり、学校でしっかりやるのが仕事と思っている。未来の教室のような学校外の取組が必要とされている認識はある。ただ今回は、i.Dareの内容について詳しいことまではわかっていなかった。最初聞いたときには不登校の子にこういうサービスをするとのこと、それは良いことだと言った覚えはある。

i.Dareを否定しているわけではない。そういう場所もあればいいと思う。

・ただ、やり方は関係者で十分に話し合いをして、教育支援センターの取り組み内容をこれから考えていくものと思っている。i.Dareでやっていることにも、教育支援センターに取り入れていくべきこともあるだろう。学校としてもすべて否定しているわけではない。

委員長

・学校外の取り組みについて学校としても認めている部分はあるということ。

・ただ、1月からのことは事前の説明等が足りなかったということ。

鈴木委員

・今日、i.Dareへ通う児童の保護者から色々な話を聞く中で、その背景にお子さんのどんな事情があったのか、何が足りなかったのかなど課題が見えてきた。

・学校にとっても大きなインパクトがあったし、先生方もショックを受けたとのことだったが、前向きに、何がいけなかったのか、何が足りなかったのかも同時に考えていく場であって欲しい。

・保護者の話でも多かったのが「子どもたちが学校がつまらない」と言っているというもの。学校が「つまらない」「普通」と子どもが言うのは、親としても寂しいなと思う。

・故郷の自然や地域との触れ合いが大切という話もあった。こんなに自然も豊かな環境なのだから、もっと自然に触れるような経験もさせてもらいたいという思いもある。

・学校と社会にギャップがあるなと感じた。学校で学ぶことに意味はない、社会に出てから勝負という意見。社会に出て必要とされる術を学ぶ場所であって欲しいとも思う。

・ただ、ひとつ皆さんと共有しておく必要があると思うのは、子どもたちだけでなく先生も息苦しい思いをしているということ。学校に対してどういう支援があれば子どもたちは楽し

いと思い、家に帰ってこんなことがあったと話してくれるような学校を作っていけるのかを話していきたい。校長先生も学校でできないことを補うのが教育支援センターの役目と言っていた。だとすれば学校でできないこととは何なのか、そこを話していけば前に進めるのではないかと思った。

委員長

- ・鈴木委員の意見も踏まえて、今後の方向性については会を重ねて話し合っていきたい。

山首委員

・今日、保護者の生の声を聞いて本当によかった。こういう形でスタートを切れてありがたかった。保護者の切実な思いを聞いてそこから私たち皆が何を学ぶかが大事。

・まず、あり方検討委員会の持ち方を委員の間で共有しておくことがまず必要。今日配布が抜かっている設置要綱の確認が必要。

・これから私達は皆の思いをどういう風に、前向きに、本当の意味での教育の町づくりに繋げていくために話し合っていく必要がある。

文科省の通知に、教育支援センターにおいて、教育委員会がコーディネーターの役割を担うとある。私達委員もこの会で真剣に話し合っていくが、同時に、教育委員会内での話し合い、行政内の関係機関との話し合いも必要だと思う。そう考えた時に、検討委員会の事務局体制が1人というのは無理があるのではないか。充実した議論をするためにも、会議の持ち方を練る必要がある。そこは委員長と事務局とも相談して考えていきたい。行政内の関係部署との連携・協議もしていただきたいし、検討委員会も一緒になって、子どもたちが安心して過ごせる場を作っていきたい。

委員長

- ・検討委員会の設置要綱についてはできるだけ早く共有していただきたい

⇒事務局

- ・本日の会の終了後に配布させていただく

・この検討委員会は期限を定めていないが、検討委員会で議論された内容は一定集約し、検討委員会の意見として取りまとめたものを教育委員会にご報告いただくこととしている。その意見を踏まえて町として事業化していく。

委員長

・確認。今日配布されているR2.1.23付の教育支援センター事業運営要綱は、i.Dareの事業の運営要綱か。

⇒事務局

・教育支援センター事業は6月以降、町が主体で取り組んでいる事業で、この運営要綱は町の教育支援センター事業の運営要綱である。

説明会資料にもあるとおりi.DareはNPO法人SOMAが主体となって取り組む事業だが、町の教育支援センター事業についてはプロポーザルを行い、結果、NPO法人SOMAが受託している。

町が委託している教育支援センターの内容を充実させる取組として経済産業省に企画提案し、実証事業として採択されたのがi.Dareであり、元々提案されている計画書でも、i.Dareはオルタナティブスクールであり、かつ教育支援センターであるとしている。

町としてもi.Dareは町の教育支援センターであると位置付けていたが、この1月以降の混乱やご批判等を受け、町としては一旦教育支援センター事業を止め、検討委員会を作りゼロベースで見直すこととした。そのため、現時点で言うとi.Dareは町の教育支援センターとしての位置付けではないということになる。

和田委員

- ・もともと教育支援センターに通っていた子供たちは、4月からどうなるのか。

⇒事務局

・6月から始まっている教育支援センターについては、毎日のように来られている児童生徒はいなかった。時々相談等に来られていた程度。

和田委員

・1月からi.Dareに来るようになった子供たちも、4月から行く機会がなくなる。その子供たちに対して具体的にどう対処するのか。この検討委員会も期間が決まっていないというが、そんな悠長な話でいいのか。早急に決めてあげないと、その子供たちはどうすればいいのか。そのことを教育委員会としても考えているか。

⇒事務局

・i.Dareに通われていた児童は8名（土佐町）いたが、新型コロナウイルスの対策でi.Dareも休校になっている状況。

2月に経済産業省の方が来られ、町や議会等に対し説明もあったが、経産省としてはi.Dareの実証事業については4月以降も継続できるよう支援をしていく考えであるとのことだった。i.Dareに来ることになった子どもたちに対して責任もあるため、町が教育支援センター事業を実施しないとしても、経済産業省としては支援を継続していく考えであるということは直接説明を受けた。

NPO法人SOMAとしても、4月以降もi.Dareに来たいという児童生徒がいるならば、町の支援があろうがなかろうが一民間団体の取組として経済産業省の支援を受けて4月以降もi.Dareを続けていく考えと聞いている。

4月以降、町としては教育支援センターの予算は無いが、i.Dareは無くなるかということ、必ずしもそうではないというのが現時点の状況である。

鈴木委員

・2月に議会の全員協議会で経済産業省が説明してくれたが、来年度の国の予算もまだどうなるかわからないが、もし町の事業としてできないのであればやれることはやっていきたいとの話だった。

・いま、新型コロナウイルスの関係で、国の方も予定していなかった支出が増えている。経産相と文科省が取り組むGIGAスクール構想でも、つくば市では国の交付金が必要額に満たない（申請額に対し減額されて交付決定された）ということも起きていると聞いた。

・国の予算にしても、もしかしたら悠長なことは言っていられない、一刻を争う状況である可能性が高いと思う。

山首委員

・和田委員の言うとおりに、まず議論すべきは、子どもたちがしんどい思いをしないで済む体制をどう整えるかということ。i.Dareに行っている子どもたちを混乱させてはいけない。不安にさせてはいけない。

・4月からどう対処するのか、保護者と教委とSOMAで早急に話す必要がある。検討委員会からもお願いしたい。

⇒事務局

・教育委員会として、今回の3月議会に向けて教育支援センター事業の予算要求をしていたが、この1月中旬以降の状況と、町長としてゼロベースで考えるという意向を表明したことを踏まえ、教育委員会としても当初予算への計上を見送った。その判断を2月上旬にした。その時点から、経産省、SOMA、教育委員会事務局の間でも4月以降どうしていくのか協議してきている。結果、現時点では4月以降もi.Dareの活動自体は継続可能で、4月以降も希望する児童がいれば行くことができる状況と聞いている。

・ただ、議会や住民さんからもi.Dareに通う児童をすぐにも学校へ戻すべきとの意見が出ている。4月以降もi.Dareへ通うことを希望する児童がいる中で、そのことについて検討委員会でもご意見をいただいて判断の参考としたいとも考えている。

鈴木委員

・2月に議会に対して経産省が説明してくれた時も、国の予算が通ればという説明だったが、その辺りはどういう状況か。

⇒事務局

・2月以降も経済産業省ともやり取りはしてきており、その間に経済産業省の方針は変わっていないが、今朝の高知新聞の記事（町長の議会答弁）を見て、経産相から「こういう状況では困る」という話が出ている。ただ、現時点で予算が通らなかったという話は聞いていない。

委員長

- ・整理しておきたい。
- ・i.Dareは4月以降、継続できる可能性が高い。ただし、町（教育支援センター）としては予算はない。
- ・i.Dareが継続できるとしても、検討委員会としてi.Dareをどう位置付けていくのかも考えていく必要がある。
- ・教育支援センターについては新年度から予算がない。どうしていくのか考えていく必要がある。

鈴木委員

・町長は、教育支援センター事業について当初予算では計上を見送ったが、検討委員会の結果次第で補正予算での対応も可能と言っていた。

新谷委員

- ・保護者としてとても不安である。ガッカリもしている。
- ・2/25の説明会の最後に、議会から町へ出された申入書についてPTA会長が話をしていた。その中に議会がNPO法人SOMAがやっていることを排除するような表現があったと記憶している。「あこ」も使えなくなる可能性もあるのか。あの場所がなくなれば行く場所はなくなる。議会は不登校児の受け皿を無くしたいのか。（傍聴席の）他の議員さんからも話を聞きたい。何が不満なのか。なぜストップをかけたいのか聞きたい。始めたものを途中で止めたら失敗だが、やり抜いたら成功。なぜそれができないのか聞きたい。教育の町と掲げているのに。学校給食無償化も保育無償化もありがたいが、それは子育て支援の取組。教育を充実させる取組の何が不満なのか、いけないのか。

⇒鈴木委員

・議会で町長に申入書を出した。その中で「教育支援センター事業は一度白紙に戻し、土佐町における教育支援センターのあり方を再検討し、民主的な手続きを通して進めることを求める。また、学校現場に混乱をもたらした責任は重く、今後、教育支援センター事業をNPO法人SOMAには委託しないことを求める。」としている。ただし、それは「あこ」を使えないようにするという事ではない。

・校長先生の話にもあったとように、学校との信頼関係が著しく損なわれたというのは大きい。教育支援センターは学校を補完するものであるし、学校との連携は必要。i.Dareを始めるにあたって学校との連携ができていなかったところが問題との指摘である。

⇒事務局

傍聴者との質疑はできない。

新谷委員

- ・過去（事前の説明不足等）を許さないということではないという認識でいいか。
- ・何か新しいことを始める時には、こういうこと（不手際や混乱）は起こるものだ。その何がいけないのか。

⇒鈴木委員

・SOMAが経産省に提出した事業計画書では、i.Dareは教育支援センターではなく、オルタ

ナティブスクール、もう一つの学校のポジションを求めている。児童も学校予算も教員も、学校と奪い合うというビジョンが書かれている。議会としてはそれはおかしいという指摘である。

単に始め方が悪かったことだけで言っているわけではない。

委員長

- ・教育支援センター事業を経済産業省の事業と一緒にしてしまったこと、それと圧倒的な説明不足があったこと。これが大きな問題点だったと思う。

- ・だからと言って、絶対にいけないということでもないと思う。i.Dareを必要としている児童は実際にいるわけなので、過去のミスはミスとして総括する一方で、今後どうしていくか考えていくことが大事。反省すべきことは反省し、これから行っていく事業がつまづかないよう、きちんとした準備をし、この検討委員会でも方向性を出していければと思う。

- ・私たちが目指すべきは、子どもたちがそれぞれの居場所を見つけて学びを深めていける環境を作ることに尽きる。そういった共通認識で今後の検討委員会に臨んでいただければと思う。

- ・そこで委員の皆さんにお願いしたい。今日配布された資料はぜひ読み込んだ上で、今後の土佐町の教育支援センターはどうあるべきか、それぞれの委員さんでも考えてもらいたい。

森委員

- ・資料・議題は事前に配布をお願いしたい。意見を述べるにも、準備が必要。

⇒事務局 了解した。

山首委員

- ・会の進め方について提案がある。この会議に期限は定めていないとの事務局からの説明であったが、会の進め方を設計する必要があると感じた。例えば委員長、副委員長と事務局で別途集まり、会の進め方を設計する時間を設けてはどうか。

- ・会を円滑に進めるうえでは事務局の体制強化も必要と感じる。

⇒全委員 賛成。

■次回検討委員会 3/27（金）18:30～